

ばおんウマン

1979. 9月

No.12

長崎女性問題研究会

事務局 松崎澄子 TEL.

【原爆特集】

事実の風化をおそれる

田吉テエ



毎年、夏季に入ると原爆問題は、かしましい。人が言うからでなく、昭和二十一年八月九日に、あの投下された原子爆弾災禍の爆風の下、炎火の中で、鬼の如く焼かれた人間の姿と破壊焼失した街の実況を肉眼で見た者にとつては、誠に筆舌に尽くし難いとは、このことだと思ふ。

最近、話してつと内いかけられる毎日が続いた。その度に、どれを、どこからと思つと、直ちに発言が出来かねるのである。そして、口惜しいのである。悲しいのである。人間の弱さの極さが、このえぐられるような痛痕と怒りをどうしたら、表現できるか。原爆、何？戦争、どんなこと？幼い孫等の澄んだ瞳に見つめられると、やり切れぬ思いがつき上りて来る。でも、真実の過去は、正

直に教え伝えておかねばならぬと私の良心は言うのである。ごまかしたり、隠したりしても、この子供等や、他地区に居た無知の人々は、歴史の真実を知りたいと希う者である。それが生きていく人間の良心だと思ふ。

この一ヶ月余、人々の表現力と向い合つて反省することが多かつた。印象に残った絵、写真、文章、歌、詩、お話、形見の品々、遺跡等、夫々に接して、ピンと来たものは、それ等を大切に保存して下さる人々の痛々しい心であつた。捨ててはならぬ、せめてこれだけでも……と肌身につけて来た、その痛々しい人間の心であつた。私は、この無形の心こそ、大事に暖めて正しく事実を伝える大衆の心としたいと希ふ。思い出すのもいやだ。惨害は有様は記憶から捨てたい。顔をそむけて知らぬ顔にしたい。という心は、人の心の片隅にあると思ふ。然し、それでいいのか。

勇気をもって、人類の将来の平和のために今立上がり、生々しい事実を見ている人々が結束して、おそれるべき核兵器を排除すべきである。自分では逃げたい!!その態度を考へ直すべきだと思ふ。事実をつくり出した者たちの責任は充分に向うべきである。再び、使用される事があるとすれば、それは全人類の破滅の時だと知るべきである。幼い者へ、

正しく伝える方法を考えよう。体験者である、長崎と広島の人々は結束して将来の人類の平和のために、生きてゐる闘争を燃やし続けたいと願う。

そして、特に、子孫を生み育てる若い両親となる人々に、将来の平和を託したいと希う。

昭和五十四年九月記

■平和への誓い■ (全文)

被爆者の希いをこめて、今ここに平和への誓いを申し上げます。覚えは、三十四年前のこの日、この時午前十二時二分、空襲警報解除！の合図にホッとして外にとび出した長崎市民一同の上に、突然おそった閃光と爆音、そして焦熱。何事ぞ、長崎は焦熱地獄——阿鼻叫喚の巷と化してしまつたのでした。

燃えさかる炎の中から、家の下じきとなつて逃げ出す、みすみす焼き殺された人々、下水を水と求めて、死に絶えた路傍の人々、母親の腕にすがつて乳を求める幼児、これをしも、生き地獄と言ふのでしようか。腹の裏に焼きついてまだに離れません。

戦争はもういやだ！平和を大切にと叫び

続けて来にこの三十有余年。あの時の新型爆弾なるものが原子爆弾であることを知り、異様な死に様が後遺症であることを知り、いまだに放射能に苦しむ病人を知り、多数の人々を一挙に失つた精神的・物質的な苦しみで耐えて来たのでした。そして、災患の中で二十余年被爆者の援護法を求める私どもの要求が無理なのではうか。未だに実現しないことが残念であります。

こうして、声も出せず死んで行つた人々や今なお苦しみ続けてゐる三十万余の被爆者の願いも空しく、核兵器は、当時の一〇〇倍もの威力をもつてふくれ上がつてゐる有様です。

人間の幸せのためにこゝに使われるべき科学の英知は、本来の使命を誤まり、大量に確実に人を殺すための兵器開発に向けられてゐるではないでしょうか。こうして出来た恐るべき核兵器が絶対使用されぬという保証があるでしょうか。

現在、世界の各地で進んでゐる核の平和利用は、最近アメリカのスリーマイル島の原子力発電所の事故の一例を見ても危険と背中合わせの有様です。

本日、この式典に参列されてゐる学校の児童代表の皆さん！その若々しい紅顔の発つたを見ていますと誠に感無量、世界平和のにない手として、素直に、たくましく、しかも鋭い英

知の持ち主として成長して下さい。国際児童年に当たり、被爆者として若々しい皆様へおののめます。

戦争は、私どもの敵、おろるべき被爆者を二度とつくり出してはいけません。やがて死に絶えるであろう私ども被爆者の生の真剣な声をどうや肝に銘じて下さい。核兵器を絶対につくり出してはいけません。一瞬にして死んだ数万人の人の声なき声を、そして、放射能後遺症のために未だに苦しんでいる人々の声を聞きましよう。

お父さん、お母さん、我が子よ、お友だちよ、そして、愛する多くの人々が、あの青い空で手を振っているのが見えませんか。陰の裏で叫んでいるあの姿を浮かべて下さい。

「命をむだにしないで、命を粗末にしないで、私どもが捧げた命で、永遠の平和を守って下さい」と。

今日、この丘に立って声なき人々の魂と、私どもの魂とが一体となり、世界の平和を推しすすめて参りましよう。

ここに、数万人の霊前に立って、若い世代に平和を求め、この心を語りつぎ、恐るべき核兵器の廃絶を目ざしていくことを誓います。

昭和五十四年八月九日

原爆の丘にて

被爆者代表

田吉千工

被爆者の声、肝に銘じ……

被爆者の希いをこめて「平和への誓い」を読み上げた田吉千工さん(左)は「長崎市西山一丁目」は爆心地の浦上とは山一つへだてた今の住まいで被爆。長崎医科大学で学んでいた長男正英さん(当時十九才)は爆死した。

現在、長崎原爆被爆者協議会の上長崎地区評議員を務めるなどこの二十年间、平和運動を続けてきた。

田吉さんには、あの日の恐怖は今でも心に焼きついている。だが「中学二年の孫には、原爆のことはピンとこないみたい。被爆者の私たちこそ語り継いでいかないと。平和を願う子を育てるのは私たちの役目。若い人への継承の絶好の機会」と大段を引き受けた。

黒のアンサンブルで平和祈念像の前に立ち参列者の方へ向かって「誓い」の言葉を讀み田吉さんの声は力強かった。

(54.8/10 毎日新聞より抜粋)

★めぐり来る。歴史の流れの中にあって、不変なのは被爆者の平和を願う心情である。今年もまた、あの暑い八月九日がおとづれ、去っていった。さまざまな感慨を胸に参列していた人々の姿が目についた。

被爆者の大半が、今はもう中堅、それ以上の壮年層に属している。ウモ腹下出血や白血球病などで倒れ、死を待つばかりという人もいる。あと何十年かたったら、被爆者が死に絶え、事鬼の証人として物語る人がいなくなるのを恐れる。

原爆とは、戦争とは、でなく、もっと広範囲に正しい歴史を語り伝えられなくてはいけない。そしてまた、被爆二世だからと悩んでいる人々こそ、真実を見極める目をもたねばならない。

い。もしかしたら、長崎ではなく、小倉に落とされていたかもしれない原爆弾のために苦しんでいるのは、人間が生きていく上での精神的苦痛を見逃しては考慮することのできないものである。現在は、平和であるか否かにかかわらず、戦後日本の歩みを全ての人が再認識し、人類全体の平和と幸福の實現を目指すなければならぬ。

原爆という名のもとにはかなくも散り、消えていった尊い生命を私達が、彼らのために、決して汚してはいけない。災禍の中で、絶叫し続けて亡くなった人々の冥福を心から祈りたい。原爆を知らない世代の人々も、もはや無知ではすまされない。

『女のノート』作成経過報告

ぼ、てんウーマンの会の長年の念願だった「女のノート」がいよいよ着手されました。セルスホイントは、粘流微醺の話で、女性の生理を知る上で必須の予備知識と言えます。そのために、若い女性などは、三年間使用可能ということよりも、それらの方に関心を示し、注文が殺到しています。これを、一つの足がかりとして、会独自の活動が大きく飛躍することになるでしょう。

九月上旬で、初校正、二校正と順調に進行し、十月には販売される見通しです。

編集後記

「女だから」、「女のくせに」という言葉をよく耳にする。男尊女卑の風潮からか？。そして、今、関白宮（言）なる歌がはやっている。女は、つましやかで、家のこととさえさうんと守ってくればいい」と当惑のこととして思っている世の中の男性諸君。もし、この地上から、女性がいなくなればどうするつもり？。男は女よりもさみしがりで、一人ではどうすることもできない。...

私は、女としての誇りを持ちたい。その前に、人間らしくありたいと願う。今後、ぼ、てんウーマンの中で、女の誇りを持つ教説を会得することができれば、と思っても男にとでは、かわいい女でいたい。（伊藤麻子）